

古代の芸能 伎楽



伎楽面「力士」(見市泰男)

推古天皇の時代に、伎楽と呼ばれる芸能が日本に伝来しました。『日本書紀』には、百済人の味摩之がやってきて、呉国で学んだという舞を伝えたこと、渡来系氏族の少年らにそれを習わせたこと、などが記されています(推古天皇二〇年は歳条)。天平勝宝四年(七五二)に盛大に執り行われた東大寺の大仏開眼会の際にも伎楽が奉納されたといい、正倉院には七十点を越える伎楽面が現存しています。

『万葉集』にも、そんな伎楽をモチーフとした歌が残されています。

池神の 力士舞かも 白鷺の 杵啄
ひ持ちて 飛びわたるらむ

(卷十六ー三八三)

この歌の題詞には「白鷺の木を啄ひて飛ぶを詠める歌」とあり、白鷺が木の枝をくわえて飛んでいる様子を見て、伎楽の「力士」の舞を連想したと考えられます。

しかし、伎楽は中世には廃れてしまったといえます。内容を知ることのできる現存最古の資料は、狛近真による『教訓抄』(一二三三年)ですが、この書の時点でも、すでに詳細はわからなくなっていたとみられています。

この歌の意味もなごらく判然としませんでした。昭和に入ってから『続群書類従』(第十九輯上、管弦部)や『日本古典全集』において『教訓抄』が翻刻されて以降は、伎楽をモチーフとした歌であった可能性が指摘されるようになりました。現在では、「力士

舞」と詠まれていることからいっても、伎楽の「力士」と関連があることは疑いようがないとみられています。『教訓抄』によれば、「力士」は棒状の道具を持って滑稽な仕草をする舞であったようです。歌の表現とも合致します。一度は廃れた伎楽ですが、残された伎楽面や文献資料などから復曲が試みられています。万葉文化館の一般展示室には、伎楽を演じている様子や、それを見学している古代の人々が人形で表現されています。また、秋の特別展「日本文化の源流―いまに続く芸能―」では、能面などとともに、写真の伎楽面も展示される予定です。

(万葉文化館上席研究員・井上さやか)



伎楽面「呉女」(藤原千沙)